

島尾敏雄詩集



高尾敏雄詩集

深夜叢書社



島尾敏雄詩集 定價 一八〇〇円

一九八七年二月一日 第一刷発行

著者 島尾 敏雄

装画 駒井 哲郎

発行者 斎藤 慎爾

発行所 深夜叢書社

営業部 東京都新宿区早稲田鶴巻町五五二

千田ビル 四〇二

電話〇三(二〇七)八〇六四

印刷／第一印刷 製本／並木製本

島尾敏雄詩集 目次

LUNA詩篇「人生の賦」

人生の賦 48

山巔の気配 52

井戸ノ中ノ指導者 56

螢 60

頂点 62

虚勢 64

飛んでもない詩 66

こころ詩篇「胸が重い」

かなしみひとつ 70

胸が重い 72

嫁いだ少女に 74

磐越西線の晩秋 76

曼荼羅詩篇「出陣」

想起来 80

出陣 81

月下の別れ 82

装画
駒井哲郎

島尾敏雄詩集

初期詩篇「春」

キャンプ。

8

一、朝早く起きて

テントの外は

真白雪だ！ 雪だ！

いそ／＼と働く友達

霧が東へ逃げたよ

二、愉快的なキャンプ

たのしいキャンプ

谷川は水だ！ 水だ

ポカ／＼とあたるお日様

一片の雲が南へ流れたよ

三、キャンプの夜

テントの外は

真暗夜だ！ 夜だ！

ひそ／＼ともれる人声

キラリとお星様が光つたよ

四、キャンプの夜中

深々とふけ行く夜

谷川の流れが

お母さんのさゝやきの如く

かすかに聞ゆる寝息

時計がカチ／＼なつてゐたよ

(昭和七年三月二十一日)

思ひ出

10

思ひ出！

美しいそして人なつこい姿で

訪れてくる思ひ出！

僕は幼い時の写真を見た

妙見山の頂上で

のどかな汽笛を聞き乍ら

田を耕す村人を

いつまでもく

見てた時の

純真な姿を思ひつゝ

(写真を見て田舎に在りし日を思ひ出して作あり。昭和七年四月八日)

T O R R O A D

自動車のサイレン

人力車のベル

青い眼の異人さん

横文字の店

そこは海港の街神戸の

異国情緒の噴水

トアロードの坂道でした

春

やはらかい陽光をなげ

万物が更生を萌す

希望に満ちた時なのだ

人生のそれにも似た

春、あゝ

陽炎の燃ゆる緑の丘

むせる様な若葉のにほひ

春が来たんだ

春、春、春

春

「あれ、あれ、あの鳴声はなんだらう」

「スカイラークだ」

「スカイラーク？ あゝ、ひばりだね」

ピーチク、ピーチク、ピーチクチク

「あんまり鳴いたら

あのまゝ天国に昇つてしまひさうだね」

緑の草にねころんだ

可愛らしい二人の子供の会話

こゝにも春はこぼれてゐます

春、春、春

やはらかい感触の春よ

健やかなれ

夕方・キャンプ・星

14

夕暮には

俺の大好きな

霧が流れる

やさしい霧だよ！

それがキャンプをして居る

谷間でどもあつて見給へ

懐しい 親しい 寂しい様な

黙つて空想につかつて居たい様な気持が